

インド

唯一熱狂するスポーツ クリケット

関口 真理

●インド人のスポーツ観

インドの国際社会でのプレゼンス拡大につれて聞かれるのが「インドがオリンピックで活躍したという話を聞きませんね」。それに答えるのは簡単ではないが、まずインドはスポーツで国威発揚を狙い、ステートアマを育てることをしなかった。その背景にはスポーツに対する価値観がある。汗を流し身体を酷使することは、インドでは社会的に地位の低い者の姿に重なる。エクササイズは肉体労働ではないという理屈は通じない。戦士やレスラーの身分に生まれない限り社会上層ほど肉体は使わない。

経済発展につれ、ダイエットやアンチエイジングのような欧米の健康文化が入って来た。朝夕の公園は老若男女のウォーキングでまるでラッシュアワーだが、エクササイズと呼べそうな歩き方の人はいくつにもいない。極端な学歴社会で

体育の時間がない学校も珍しくなく、そもそもインド人にはスポーツをする感覚がないという指摘さえある。つまりインドは、スポーツが愛され、優れたアスリートが生まれる土壌ではなかったということだ。

●大英帝国のスポーツが植民地で沸騰

そんなインドが例外的に熱狂するのがイギリス発祥の「紳士のスポーツ」、クリケット。地域、民族、階層などによって多様な文化や価値観が存在するなか、唯一の全国共通の娯楽かもしれない。

クリケットはまず、植民地のイギリス人が社交やスポーツを楽しんだクラブに持ち込まれたが、メソバを埋めるため彼らと交友のある上流インド人が参加するようになった。やがてインド人だけのチームも結成され、ボンベイ（ム

ンバイ）ではイギリス対インドの定期戦も始まった。独立運動の高揚と重なる二〇世紀前半には、イギリスの選抜チームがインドに遠征してくるようになった。定期戦にせよ遠征戦にせよイギリスにまったく歯がたたなかったインドが、ついに勝利を勝ち取る日が来る。独立運動に先駆けてイギリスに勝った！ボンベイ市民の熱狂はすさまじいものだった。クリケットがインドの大衆の関心をひときり集めるスポーツになった背景にはこうした歴史がある。

ただし、クラブ入場が許されずテレビもない時代、大衆は実際には観戦しておらず、勝利という結果がすべてであった。実はここに、現在もインドのスポーツが抱える問題が垣間みえる。自身にスポーツ体験が少ないこともあって、勝敗以外の部分、試合経過、戦略、選手の技量、起用方法などに驚く

ほど無関心であったりする（有閑貴族に愛されたクリケットはルールやセオリーが複雑で、その堪能も楽しみ方なのだ）。

独立後、クリケットは英国パブリックスクールの伝統を継ぐ名門校や地域のスポーツクラブを通じてインドのスポーツとして定着していった。イギリスやオーストラリアとの対抗戦は新生国家の誇りを賭けた国際舞台になった。一九七五年にワールドカップが創設され、一九八三年大会ではインドが初優勝を成し遂げる。その後、インドの経済発展を受けてテレビ放送の普及が進むとクリケット人気が急速に拡大し、特に従来はブレイ機会のなかった社会の下方に浸透した。

下町の路地裏や空き地、農村の休耕地、どこに行ってもありあわせの用具で「草クリケット」に興じる人々の姿がみられるようになった。プレーヤーの頂点、国代表のスター選手も王族の末裔や名門校の出身者が占めてきたが、現在の代表キャプテンM・S・ドーニーは「初の農民階層出身キャプテン」といわれるし、兄弟で代表に選ばれたイルファーンとユスフ・パターンの父親はアザーン



インドと南アジア各国、オーストラリアの代表ジャージと観戦グッズ（筆者所蔵）

（礼拝の呼びかけ）朗唱者で、兄弟はモスクの片隅の仮小屋で育ったという。若年層の多い人口一二億超の国に、まだどれだけの才能が眠っているのか計り知れない。

南アジアの隣国パキスタン、スリランカ、バングラデシュが強豪国であることも事情をより熱くしている。試合が国家対立の代理戦争と化し、勝敗いかなによって両国に悲憤の死者も出る印パ戦、実力世界最高峰の好試合が展開する

スリランカ戦、巨人に捨て身で挑む若武者ぶりが感動的なバングラデシュ戦。クリケット人気を事実上牽引する南アジアの人口規模から、競技されるのがほぼ旧英領地域に限定されるのに「クリケットはサッカーに次ぐ世界第二のスポーツ」と評されることもある。興行収入や広告といった経済効果から社会的影響力まで、本家イギリスでも、実力世界最強のオーストラリアでもなく、世界のクリ

ケット界はインドと南アジアが仕切っている。

二〇〇八年にはクリケットの本格的プロリーグ、インディア・プレミアリーグ（IPL）が発足した。

世界の名選手を高額の報酬で集め、アメリカのプロスポーツのように派手にショーアップされた、本家のクリケットからかけ離れたインド産のクリケット・ワールドである。

インドの子どもが口にする将来の夢はエンジニア、医者、クリケット選手と相場が決まっているが、実はインドのクリケット界は政界と並ぶダーティーさで悪名高い。試合結果が賭博の対象になり、報酬を受け取った選手が八百長をする事件が後を絶たない。スターとなった選手たちは、傲慢な言動や貧しい過去を忘れた金満生活ぶりでファンの反感を買う。地域、州から国レベルの協会、果ては国際クリケット評議会（ICC）までが、役職を占めるインドの政治家や財界人、裏世界の实力者たちの政争や利権争奪の場にされている。この原稿執筆の時点で、八百長事件への連座疑惑で資格停止中のインド・クリケット協会の前会長が、ICCの会長を務めているのだ！

こうした関係者が目先の試合結果や利益だけを追い、競技のセオリーが忘れられ、選手育成や将来への展望を欠いた球界から、クリケットを真に愛するファンが離れ始めているともいわれる。インドは二〇一一年ワールドカップに優勝、一五年大会も予選全勝で優勝間違いなしと鼻息荒かったが、準決勝でオーストラリアに大惨敗を

喫する。大会のベストメンバーにインド選手は一人も選ばれなかった。ファンはこの事実をどう受け止めているだろうか。

●クリケットの先には

経済発展とグローバル化のなかで育った若い世代には、スポーツへの姿勢も含めて価値観の変化がみられる。テニス女子のサニア・ミルザ、バドミントン女子のイナ・ネヘーワル（世界ランク一位）、ボクシング女子のメアリー・コム（ロンドン五輪銅メダル）らの世界的成功が、本気でスポーツに取り組む若者や、子どもにやらせてみようという親を増殖させる。サッカー（フットボール）未開の地といわれたインドでも欧州や南米リーグの中継がファンを拡大している。しかもサッカーに入れ込むのは富裕層の子弟に目立つ。高額な専門チャンネルが視聴でき、学校ではサッカー・クリニックが開講され、本場に観戦にも行ける。インドでは今や母国イギリスとは逆に、クリケットの方がよほど大衆スポーツなのかもしれない。（せきぐち まり／亜細亜大学、大妻女子大学、淑徳大学非常勤講師）